

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

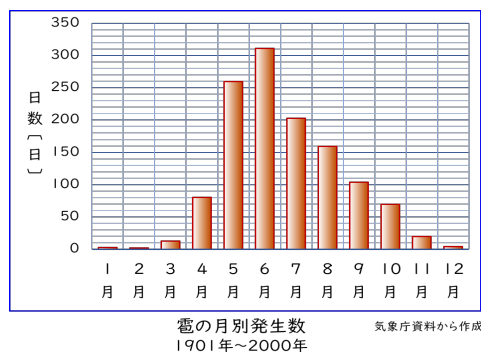
Contents

1. ひょうの季節
2. 気象業務150周年 ～6月1日は気象記念日です～
3. 梅雨前線とは？

1 ひょうの季節

先月、5月13日、中国の北京市周辺で大きなひょうが降ったことが伝えられました。大きさはピンポン球大とのことで、人的な被害については報じられていませんでしたが、車のガラスや建物の屋根などに穴があくなどの被害があったようです。

日本でも毎年、この季節になるとひょうによる被害が出ています。下図は気象庁の資料をもとに1901年から2000年までの100年間の月別の降ひょうの回数を示したものです。



ひょうは氷の粒の成長したものですから、ひょうのもととなる氷の粒ができるために雲中の気温が0℃以下になっていることが条件のひとつです。もうひとつの条件としては、小さい氷の粒が互いにくっつき合うなどしてひょう〔直径5ミリ以上〕の大きさにまで成長するには、ある程

度の時間、動きながら雲中に留まることも必要です。さらに、氷の粒のもととなる水蒸気が下層から十分に補給されることも欠かせません。上空の寒気や下層の暖かく湿った空気といった条件がそろそろ5月から7月頃にかけては発達した積乱雲の中でひょうが作られることになります。頻度は少ないものの、上記の時期以外にも降ひょうはありますが、条件を考えると農作物や建物などに被害をもたらすような大きな降ひょうは少ないようです。

上記の100年間の資料で県別の発生数をみると、上位5県は栃木、群馬、長野、山梨、埼玉でいずれも100年で170件から250件近い降ひょうがありました。本州中部の内陸の県で多くなっていますが、これは日中の強い日射による下層気温の上昇などが、ひょうをもたらす積乱雲の発生に関わっているものと思われます。ただ、降ひょうによる被害は全国で発生しており、農作物の生育期に当たる時期には大きな被害につながる可能性があります。

ひょうは積乱雲の中の上昇流が強い場所で長く留まるほど大きく成長します。日本でも過去にはピンポン球や鶏卵大などといった記録が残されたものがあり、人的被害につながるおそれもあります。「ひょうに注意」といった情報が発表されている時には、特に注意が必要です。





2 気象業務150周年 ～6月1日は気象記念日です～

6月1日は「気象記念日」です。気象記念日は、明治8（1875）年6月1日、東京府第二大区溜池葵町（現在の港区虎ノ門）の内務省の地理寮構内にて「東京気象台」として気象業務が開始されたことから、この日を記念して制定しました。

また、今年（令和7年）は、気象業務開始から150年の節目の年となります。気象庁では、150年を記念してロゴマーク（右図）の作成や、キャッチコピー「**歩み続けて150年 防ぐ災害・守る未来**」、記念切手（左図）の発売（2025年5月28日）を行っています。

150年前に業務が始まった東京気象台が1884年に初めて発表した天気予報は「**全国一般風ノ向キハ定リナシ天気ハ変リ易シ但シ雨天勝チ**」という日本全国の予想をたった一つの文で表現したものでした。当時は、収集した気象データ（観測したデータを電報で送っていた）を基に天気図を書いて、大まかな予報が行われていました。この時期の予報は精度に限界がありましたが、自然災害から国民を守るための重要な一歩でした。

時代は進みますが、しばらくの間は観測したデータを電

報で送って、それを天気図に記入・解析して天気予報を行うことが主流でした。それが大きく変わるの、コンピュータによる数値予報の確立とその進歩です。今では、2週間先の予報や1キロメッシュの気象状況など、150年前には想像もできないくらいに格段に進歩しています。

今も昔も気象庁の使命は、災害から国民を守ることで何ら変わりません。先人からの努力の積み重ねで精度の良くなった気象情報を活用して災害を防ぎたいものです。



気象庁HPより
左図：記念切手
右図：150周年ロゴマーク

3 梅雨前線とは？

令和7年の梅雨では、気象庁で統計を開始以来初めて九州南部が最初に梅雨入りしました。

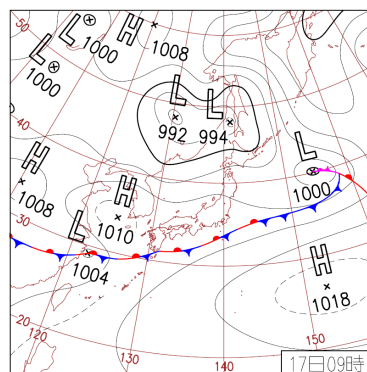
春から夏に向かうときに、南にある暖かく湿った空気をもった太平洋高気圧が張り出してきて、北にある冷たい空気をもったオホーツク海高気圧や乾燥した大陸の高気圧と日本のあたりでぶつかるようになります。この境界に出来る前線を梅雨前線と呼びます。太平洋高気圧の強まりとともに、南から次第に北上することが多いので、南に位置する沖縄地方や奄美地方が先に梅雨入りすることが多いのです。

なお、気象庁では8月頃に前後の気象状況を改めて精査して梅雨入りが妥当であったか再検討して、見直すこともありますので、九州南部が最初に梅雨入りしたかどうかは、9月初めに確定することになります。

ところで、前線の種類は、正式には「温暖前線」「寒冷前線」「閉塞前線」「停滞前線」の4種類です。梅雨前線は、気象界の正式名称ではなく、梅雨のある日本の独自の表現ということになります。テレビの天気解説等

で、日本のどこかで梅雨入りしてから梅雨前線の表現を使い始め、全国（梅雨のない北海道を除く）で梅雨明けしたら使わなくなるのはこのためです。梅雨入り前・梅雨明け後は、いかにも梅雨前線の形をとっていても、梅雨前線とは表現されないのです。不思議ですね。

また、梅雨の時期に「梅雨前線」と特別に使うのは、梅雨前線による大雨が多く発生していることから、大雨への警戒を呼び掛けるためでもあります。6月から7月にかけては梅雨本番になりますので、梅雨前線の動向にも注意しなければなりません。



左図は令和6年6月17日09時の地上天気図です。この日は、九州北部で梅雨入りが発症されました。この天気図のように、梅雨前線は東西に長く伸びて、停滞することがあり、広い範囲で大雨をもたらすこともあります。特に、梅雨前線の南側では南からの暖かい湿った空気が流れ込んでくるのでより注意・警戒が必要です。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。



NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22口ーヤル若葉105号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

